



## 2. たとえ5名でも授業を始めよう!

「5名いれば開校する」というのがホフマン学長の意志であったが、予科には20名の応募があった。実際の授業が始まった4月21日の出席者は15名であった。同時に社会人を対象にした夜学の語学講座も開設され、1913年3月26日に東京都知事から「私立独英夜学校」の名称で、正式に認可を得た。就業年限2年、土曜日には文学や学術に関する講義が英語やドイツ語で行われた。語学講座は4月11日に開講され、36名がドイツ語講座に、11名が英語講座に登録し、最終的に外国語学校は70名ほどでスタートした。

当時は、予科2年の課程を修了すると本科に進み、3年の課程を経て卒業する仕組みであった。三つの学科生は、予科では一緒に授業を受け、ドイツ語が第一外国語、第二外国語が英語であった。本科になるとドイツ語で行なわれる授業が多かったため、予科時代にド



最初の授業が行なわれた大島館



赤星邸は男子学生寮(後にアロイジオ塾と命名)となる

イツ語を習得することが求められた。このドイツ語の授業では

ホフマン学長自らが、力の入った情熱的な講義を行なった。「ドイツ語の上智」という後代の評価の原点である。

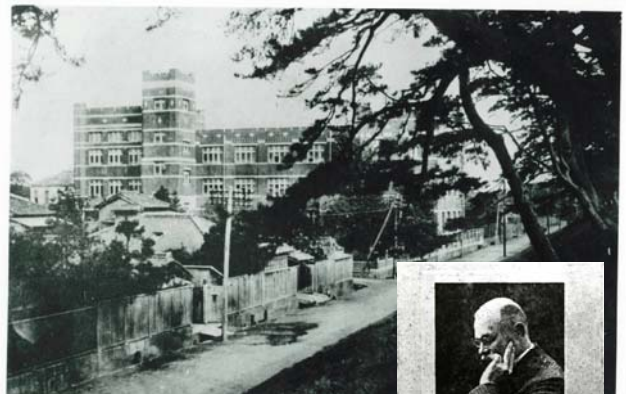


ホフマン学長のドイツ語による講義風景

しかし、いまだ校舎もなく、大島邸を仮校舎に赤星邸を寄宿舎としていたが、1914年9月に待望のレンガ造りの3階建て校舎が竣工。建坪232坪、延750坪で、屋上に庭園のある豪華なものであった。設計者はヤン・レッツルというチェコ人で、広島の高島物産陳列館(今の原爆ドーム)を設計した人物である。新校舎はゴシック建築で、その赤レンガ色は江戸城外濠(現在グラウンド)の土手の老松とマッチして、あたかも中世の城を思わせるものがあった。「玄

関を入ったホールにはゲーテとシラーの胸像が左右に置かれ、廊下や教室の天井も高かった」と『上智大学五十年史』は伝えている。

しかし、この新校舎も10年後の関東大震災で一部瓦解し、ザビエルの夢とローマ教皇の期待をのせた上智大学の船出は、前途多難を思わせた。



1914年に竣工した赤レンガ校舎。校舎内部(左)と外観(右)。ヤン・レッツル(右下)の設計による

